

はじめに——「奴隸制」と資本主義

私たちは今、資本主義社会に生きている。その日々の暮らしの中で「奴隸制」という言葉に出会う機会はまずない。しかし、実は「奴隸制」と資本主義には密接な関係があることを、あなたはまだ知らない。

「奴隸制」という言葉を聞いてすぐに思い浮かぶものは何だろう。ギリシアやローマの古代地中海世界だろうか。中には、小学校の図書室で読んだストー夫人の『アンクル・トムの小屋』（アメリカ南北戦争前の一八五二年に出版された小説）だという人もいるかもしれない。そもそも人間が「奴隸」であるということは、どういうことを意味しているのだろうか。

紀元前四世紀のギリシアの哲学者アリストテレスは、著書『政治学』の中で、「国家共同体」の基礎単位であり、経済（economy）の語源の源流の一つでもある「家」について次のように述べている。

家 [oikia] は、完全な形では、奴隸たちと自由人たち [doulikon kai eleutheron] とから成り

立つものである。(中略)家の最初にして最小の部分は、主人と奴隸「δούλος」、夫と妻、父と子という関係なのである。¹⁾

ここからわかるのは、古代ギリシアのアテナイでは、個々の家ごとに家事労働や農業労働の担い手としての奴隸がいた、ということである。アリストテレスは、こう続けている。

奴隸は生命のある一種の財であり、手伝う者はすべて、道具のなかでもひときわすぐれた道具のように振舞う。(中略)人間でありながら、自然によって自分自身のもではなく、他のもののものである者、これが自然による奴隸にほかならない。およそ人間でありながら財であるような人間は、他のものの所有物である。²⁾

人間が他の人間の所有物になる、ということがなぜ起きるのか。アリストテレスは、それが「自然による」ものであることを、それこそ不自然なほどに強調している。彼はこうも述べている。

自由人と奴隸が異なる体形に造られているのも自然の意図によるのである。奴隸の体は、

欠くべからざる使用に耐えられる屈強なものであるけれども、自由人の体は、背筋がぴんと張っていて、そのような作業にはむかないが、市民としての生には適している。(中略)かくして、自然によって自由人である人びとと、奴隷である人びとがいることは明らかである。そして後者にとって、奴隷であることは有益でもあり、正しいことでもある³。

自然による、ということとは、要するに「生まれ」による、ということだ。生まれながらに奴隷となることを運命づけられた人間が存在する、ということである。ただし、アリストテレスは、彼らもまた同じ「人間 *ἄνθρωπος* = anthropos」であることは認めている。では、実際はどういう人びとが奴隷にされたのか。

イギリスの歴史家ペリー・アンダーソンによれば、古代ギリシアでは「おそらくそれ以前まではそれ以後の他のいかなる生産様式においてよりも、軍事力が経済成長と緊密につながっていた。というのは、奴隷労働の主要な唯一の源泉は、通常は戦争の捕虜であり、他方、戦争のために自由人を都市の軍隊に徴募することは、国内における奴隷による生産の維持に依存していたからである⁴」。

その戦争捕虜が「生きている道具」として売買の対象ともなったのだが、「奴隷——主としてトラキア人、フリュギア人、シリア人——の価格はきわめて低く、奴隷一人を一年間扶養す

るに要する費用程度であった。そこで奴隷使用は、生来のギリシア人の社会で広くゆきわたり、最下層の職人や小農民さえも、しばしば奴隷を所有するまでにいたった。

そうだとすれば、たしかに「奴隷」はギリシア人とは生まれが異なる人びとであり、文化的・地理的などのさまざまな条件によってギリシア都市国家の重装歩兵の侵入に抵抗できなかった人びとだった。その結果、故郷での生活や共同体から切り離されて「裸の個人」としてギリシアの都市国家に囚われ、そこから脱走できなくなった人びとだ、ということになる。このような事情は、規模の大きさを別にすれば、これから見ていくことになる近代の奴隷制とほとんど変わりが無いといえるだろう。

なお、ギリシアの奴隷は「ドウロス *δοῦλος* = *doûlos*」、ローマの奴隷は「セルウス *servus*」と呼ばれたが、近代のヨーロッパ諸語では「スラヴ人 *Slav*」に由来する言葉が用いられている。英語の〈*slave*〉、フランス語の〈*esclave*〉、ドイツ語の〈*Sklave*〉などである。アンダーソンによれば、これらの元となったラテン語の「スクラウス *sclavus*」が出現するのは一〇世紀だが、それは当時のロシアに侵入したスウェーデン・ヴァイキングによるヴァリヤーク王国が「イスラム世界への奴隷輸出の上に築かれた一個の商業帝国」⁶ だったからであり、「その奴隷は全スラヴの東方から集められ、アラブに征服された地中海地域やペルシアの地、およびギリシア帝国に供給された」⁷ からだった。「スラヴ人」が奴隷の代名詞となったのである。

そのような「スラヴ人」たち、あるいは、「新大陸」発見の後、一六世紀以降に西アフリカから大西洋を渡って南北アメリカに連行された近代の「黒人奴隸」たちは、現代の私たちといったいどのような関係があるのだろうか。

一八六七年に出版されたカール・マルクス（一八一八〜一八八三）の『資本論』第一巻の終わり近く、「いわゆる本源的蓄積」を論じた章で、私たちは次のような文章に出会う。

綿工業はイングランドには児童奴隸制を持ちこんだが、それは同時に、以前は多かれ少なかれ家父長制的だった合衆国の奴隸経済を、商業的搾取制度に転化させるための原動力をも与えた。一般に、ヨーロッパにおける賃金労働者の隠された奴隸制 [die verhüllte Sklaverei] は、新世界での文句なしの奴隸制 [die Sklaverei sans phrase] を踏み台として必要としたのである。⁸

イングランドにおける児童奴隸制！ ヨーロッパにおける賃金労働者の「隠された奴隸制」！ しかもそれは新世界＝アメリカ合衆国の奴隸制と密接な関係があり、それを「踏み台 Piedestal = 台座」として、その上に立ち上がっている、というのである。資本主義は奴隸制を前提とする。そして資本主義は奴隸制を必要とする！

しかし、『資本論』は資本家階級による労働者階級の「搾取」を論じた本ではなかったのか。「二重の意味で自由な」賃金労働者は奴隷とは違う、とマルクスは言っていたのではなかったのか。

「隠された奴隷制」というからには、隠されているのは奴隷制だとしても、何がどのような意味でそれを「隠して」いるというのだろうか。そして、ヨーロッパの賃金労働者が「隠された奴隷制」に囚われているのだとしたら、現代の私たちも「隠された奴隷制」の中にいるのだろうか。

この「隠された奴隷制」という言葉の謎を解くために、近代の奴隷制の歴史を振り返り、そして奴隷制をめぐる言説の歴史をたどり直してみること、そして資本主義と奴隷制との切っても切れない関係をあぶり出すこと、それがこの本の課題である。それでは、三五〇年にわたる奴隷制の思想史に分け入ることにしよう。

【はじめに】

- 1 アリストテレス『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会、二〇〇一年、一二頁。
- 2 同書：一四～一五頁。
- 3 同書：一八～一九頁。
- 4 Anderson, Perry. *Passages from Antiquity to Feudalism*. London: New Left Books, 1974. p.28.
青山吉信・尚樹啓太郎・高橋秀訳『古代から封建へ』刀水書房、一九八四年、一九頁。
- 5 *ibid.* p.36. 三二頁。
- 6 *ibid.* p.176. 一八四頁。
- 7 *ibid.* p.235. 二四八頁。
- 8 Marx, Karl [1983] *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*. Bd.I, in: Karl Marx und Friedrich Engels, *Gesamtausgabe* [MEGA], II/5, Berlin: Dietz, S.607.
岡崎次郎訳『資本論』第一卷、『マルクスⅡエンゲルス全集』〔以下「全集」〕第二三卷第二分冊、大月書店、一九六五年、九九一頁。